

災獣たちの楽土3
蒼海の祈り

尾白未果
Mika Ojira

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画

深遊
平面惑星

地図

目 次

あとがき	終章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
244	231	195	151	71	15	7

災獣たちの楽土 3

蒼海の祈り

末姫
すえひめ

律花之国主の末の妹



郁耀
いくちやう

芳卷の国主



登場人物 紹介

大姫
おおひめ

律花之国主



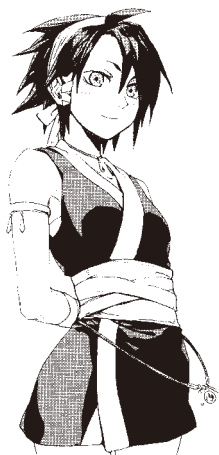
煌烈
こうれつ

芳卷の宰相、郁耀の兄



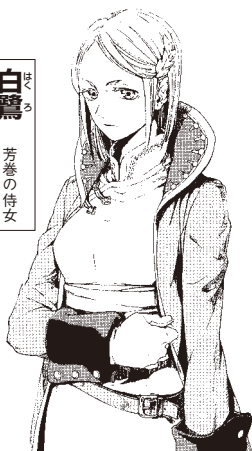
真汐 ましお

龍神の民、潮読



白鷺 はくろ

芳春の侍女



浮雀 ふじやく

晚鷄の弟子



晚鷄 ばんけい

鳥刻師



氷晶 ひしょう 律花から留学してきた職人
緋乃人 ひのひと 神槌の青年、閃の思い人
閃 せん 雷獅子
東雲 しのめ 神槌の国主
深宵 みよい 神槌の国妃
瑞雨 ずいう 神槌の前国主

荒谷 あらや 緋乃人の仲間
島渡 しまたり 真汐の父
依守也 いすや 薙古の元役人、戦艦
流火 るか 環天の焰遊民、依守也の婚姻相手
太於 たお 依守也の愛犬、戦艦
多玖良 たくら 薙古の将軍、戦艦



風鳥

芳卷の災獣

凍狐

律花の災獣



- 雷獅子…… 神槌の災獣
 焰馬…… 環天之災獣
 震魚…… 薙古の災獣
 戦艦…… 人に憑く災獣

りっかのくに
律花之國



かんてんのくに
環天之國

かんづちのくに
神槌之國

よしまきのくに
芳卷之國

なぎふるのくに
薙古之國

五島関係図

序 章

初夏の風が甘い草の香りを運んでくる。

塔の上から遙か遠くを見渡せば、一面緑の大草原が果てなく広がっている。風を受けて草がいつせいに靡くさまはまるで大海原を臨むよう。

緑はこの国で一番尊い色だ。

中でも伸び盛りの若草の明るい緑は、ことのほか美しい。

「まるでお前の翼のようだね」

歌うように囁いて、郁耀は背後に微笑みかける。

そこには美しい翡翠色の巨大な羽毛の塊がある。

この芳卷之国の災獣、風鳥が翼を休めているのだ。

光沢のある翡翠の羽毛は、風の動き光の具合で微

細に表情を変える。

美しい胸の毛がふるふると動いたかと思うと、郁耀の目の前に金色の嘴が突き出て来た。

郁耀の背丈ほどもある長い嘴の先が、器用に彼の金色の髪をくすぐる。

郁耀が腕を伸ばしてその嘴を撫でると、『ふんつ』と不機嫌そうな声がした。

『草の色なんかと私を比べないでちょうだい』

「おや、ご機嫌斜めだね」

郁耀は肩を竦め、金の嘴が自分から離れていくのを悲しげに見つめた。

「去年、お前の翼の色を初夏の草にたとえて謳った時にはたいそう喜んでくれたのに」

『あの時の私と今の私を一緒にしないで』

ぶんと風を切って嘴が横を向く。

おやおやと苦笑して郁耀は大草原を見渡した。

「そうだね、確かにお前の翼の美しさを表すには、少しくすんだ緑かもしれない。けれどお前は日々美

しくなるから、この世界でお前をたとえるのに相応ふさわしい言葉などすぐになくなってしまふよ」

「そうだろう？ と見上げると、長い嘴の向こうから金色の二つの目が郁耀を見つめ返した。

「お前は何かそんなに不満なのだろうね？」

優しい声で言いながら、郁耀は数歩あらずさり、忙せわしく動く風鳥の顔を見上げる。金の嘴、金の双眸ほう、そして頭を飾る金の冠かんむり。

完璧に美しいはずの風鳥の目には何故か陰りがある。陰りというよりは苛立ち。

郁耀が美しく整えた眉まゆを曇くもらせると、風鳥は『何さっ』と呟ささやいて、翼の間に顔を突っ込んだ。

『失礼な郁耀。郁耀だって、その目が草みたいな色だなんて言われたら腹が立つでしょう？ だって草なんて、馬や羊が食べるものなの』

郁耀は「すまない」と風鳥の羽毛によく似た翡翠色の目を伏せた。

「お前は今、とても辛いのだったね。お前に仕える

国主だというのにそれを察してやれない私はなんと愚おろかだろう。許しておくれ」

長い金の睫毛まつげがなめらかな頬ほに影を落とし、薄い唇くちびるが漏らす溜息が顔にうちかかる金の髪を揺らす。

風鳥がことのほかお気に入りの憂うれい顔だ。

彼女の心を動かすのはまっとうな議論ではなく自分のこの美貌。だからそれを使う時には顎あごの線や首の動きにも注意しなければならない。

背中に風圧を感じたかと思うと、顔のすぐ横から巨大な嘴がぬつと突き出て来た。

横目にちらりと見ると、郁耀の顔を覗き込む金色の瞳と目が合う。

『やっぱりお芝居だわ』

風鳥は呆れたように呟ささやき、それでも表情の乏しい目を幾分穏やかにして郁耀の肩に嘴を擦すり寄せた。

『狡ずるい郁耀』

郁耀はくすりと笑って風鳥の金の瞳に向き直る。

「けれどお前は、私のそういうところが好きで国主

にしてくれたのだろう?」

風鳥はやや拗ねたようにぶるぶると頭の冠を揺らす。同時にそこから小さなつむじ風が起る。つむじ風は塔の屋上に敷き詰められた色とりどりの花びらを巻き上げて、静かに空に消えた。

郁耀は落ち着いた仕草で、髪や肩に降り注ぐ花弁を指で払う。そうしているうちに、風鳥の両翼がゆつくりと開き始めた。

「我が愛しの姫君は、またどこかへ飛んで行ってしまふのかい? 今日はこちらへ楽団を呼んでお前の好きな舞曲を奏でさせようと思っていたのに」

『飽きたわ』

風鳥は金の嘴をつんと天に向けて翼を少しずつ開いていく。

羽の一本一本の間から風が生まれ、郁耀の髪や衣を乱す。軽く溜息をついて、郁耀は数歩後ろにさがった。

「舞曲が嫌ならその場でお前を讃える新しい曲を作

らせよう。……そうだ。庭師がお前に似合う新しい花がもうすぐ咲くと言っていた。今日辺り開くかもしれないよ。楽しみだろう?」

『花なんていらない』

風鳥は冷めた声で返事をしてぱつと翼を広げる。

太陽が陰ると同時に、草原がざわめきだした。

ここここと風の唸る音が近づいてくる。

風が、風鳥が飛び立とうとする気配を感じて集まって来ているのだ。

「何でも言ってごらん。お前の望むものならきつと叶えてみせよう。この私の命に代えても」

風の音に負けぬよう、しかしあくまで優雅さを失わない口調で郁耀は語りかける。

しかし、風鳥は首を曲げてちらりと郁耀を見下ろしたただけですぐに視線を天に向けた。

『もう少しだったのに……』

口惜しそうな声が雨粒のようにぽつりと落ちる。

『あの陰気な魚……。雑古なんて滅ばいいって思

つてたくせに結界を開く直前に氣を変えろなんて。
ああい陰気なやつて執念深いのよね。馬鹿みたい。嫌われ者の泥魚のくせに』

「まだそんなことを言っているのかい？ もう一年も前のことではないか」

郁耀は肩を竦めて乱れた前髪を整える。

「何度も言うけれど、薙古なんて手に入れても良いことはひとつもないよ。国中灰色で山が煙を噴いているそうではないか。お前の美しい翼が灰で汚れてしまったら、私は悲しくて夜も眠れないよ」

『そういうことじゃないんだってば』

風鳥は苛々と身を震わせる。

『氣に入らないの。私以外の災獣はみんな嫌い。震魚は陰気だし雷獅子は生意気だし焰馬は能天気だし。他の国なんてみんな海に沈めばいいんだわ』

「凍狐は？」

郁耀はすっと目を細めた。

「お前は凍狐も嫌いなのかい？」

『知らないわよ。あの婆さん、生きてるんだか死んでるんだかまるつきり氣配がないんだもの。だけど、いくらついても結界が開かないから生きてはいるんでしょ？ やる氣がないならさつきと私のために結界を開けばいいのに。本当に年寄りのがめつくて嫌だわ』

「あんまりお転婆が過ぎて龍神さまに叱られても知らないよ」

『龍神なんてせいぜい波を高くすることしかできやしないのよ。空を飛ぶ私には関係ないの』

「それは頼もしいけれど、お願いだから律花との境では暴れないでくれ。あの国は大事な商売相手だし、それに今日は兄上が律花へ向かうのだよ」

『昨日も聞いたわよ。……ねえ、今度こそ、ちゃんとした花嫁候補を連れて来るんでしょね？』

「期待して待つておいで。今度はきつとお前を満足させるに決まっている」

どうだか、と風鳥は呟く。

『郁耀よりも綺麗な男の子を産めそうな女じゃなかったら、他国の姫君だろうと何だろうと吹き飛ばしてやるんだから』

じゃあね、と言いつ残して風鳥は両翼で空気を叩いた。その瞬間、凄まじい風が巻き起こり、花びらが渦うずとなって空に舞い上がる。

色鮮やかな嵐の中で、郁耀は溜息をついた。

風鳥はそれに気づいた様子もなく、金の爪つめで塔を蹴り、青い空へ舞い上がる。

一回、二回と風鳥は羽ばたいた。

そのたびに高度がぐんぐん上る。

翡翠の巨大な翼は郁耀の胸を彩る花飾りほどに小さくなり、日輪と重なって黒い影になった。

ごうごうと風がざわめき始める。

草原の上空で風鳥が輪を描くと、それにつられるように風が渦を巻き始め、千切れた草や土埃を舞い上げてうねりながら立ち上がる。

竜巻の生まれる瞬間だ。

高く美しい声で風鳥が囀さえずると、まるで母鳥の後を追うひな鳥のように、竜巻が風鳥の五本の尾羽に追いついた。

風鳥はそのまま、尾に竜巻を従えて、西の方角へと飛んで行く。

「……今日は神槌かんづちか」

郁耀は額ひたいに手を翳かざし、あつと言う間に点になる風鳥の姿を見送る。

その時、背後で扉が開く音がした。

塔の屋上へ出るための扉には、鮮やかに彩色された風鳥の彫刻が施されている。その扉を開いて姿を現した長身の男は、兄の煌烈こうれつだった。

母親が違ちがうせいだろう。郁耀と煌烈は容姿が似ていない。郁耀の髪が金色で目が明るい緑なのに対し、煌烈は黒髪で目は灰色に近い深緑だ。

どちらかと言えば細身の郁耀に対して、煌烈は武人のような体つきをしている。

見た目が無粋だからという理由で何代も前に廃止

になり、今や城の宝物庫でしか見ることでできない近衛大将の鎧よろいを着せたらさぞかし似合うだろうと思うが、口に出せば兄は嫌な顔をするだろう。

「おはよう兄上。今日も良い風だね」

華やかに笑いかける郁耀に対して、煌烈はにこりともしない。

今日に限らず、煌烈は子供の頃から顔面に力を入れた渋い表情をしていることが多い。そのせいで、郁耀と三つ違いの二十七歳だというのに、既に三十半ばくらいに見える。

国の宰相という役目からすれば、このくらい貫禄がある方が良いでしょうが、朝から見るとは少々重苦しい。

「神槌へ向かっていた商船との連絡が途絶えたと報告があった。聞いているか？」

「おやおや。あれほど言ったのに」

郁耀は風鳥が飛んで行った空を見つめる。

「また沈めてしまったかな」

煌烈は苦々しい顔で同じ方向を睨にらんだ。

「それに伴い、交易長官より陳情があった。このままだと律花以外との交易は絶望的だそうだ」

「まあ、そうなるだろうね」

郁耀は衣にまわりついた花びらを払う。

「せっかく神槌も落ち着いて、良い商売相手になると思っていたのに……困ったね」

「それで済むと思っているのか？ 神槌のことだけではない。港で龍神の民が噂うわさしているらしいぞ。最近我が国の海域全体の潮の流れがおかしくなっていると。何故だかわかっているか？」

「我らが姫君のご機嫌が悪くてあちこちでおいたをしているのが原因だというのだろうか？」

国の海域が荒れるのは災獣の心が乱れる時だ、と郁耀は亡き父から聞いたことがある。それは国主にとっては恥なのだが、と何度言われたかわからない。ここ数年、他国では海が荒れ狂っていた。震魚が起こす災厄から逃がれようとした薙古が、隣国の神

槌や環天^{かんてん}を支配しようとし、その国の災獸を怒らせ
たからだ。

その頃、風鳥は大層機嫌が良かった。

困ったことに、風鳥にとって他の災獸の心が乱れるのは喜ばしいことなのだ。自分が他の災獸に比べて一番幸せなのだと満足していられるから。

ところが、三国の海が鎮^{しず}まると今度は風鳥の心が乱れ始めた。芳卷^{よしまき}にとっては他国が落ち着いて豊か
となのだが、風鳥にとって他の災獸の幸せは苛立ち
の種でしかないらしい。

「まったく……」

煌烈は溜息をついて、皺^{しわ}の刻まれた眉間^{みけん}に手を添
えた。

「いつそ他の国が荒れたままでいてくれた方が平和
だったな」

「それを言ったらおしまいだよ」

郁耀は兄の横顔を見つめ、ふと顔を綻^{ほころ}ばせた。

「兄上、今日の衣装はなかなかいいね」

何？ と煌烈は眉を吊り上げ、自分の衣装の胸元
を引つ張った。常緑樹のような深い緑色の衣は煌烈
の瞳の色に似て、落ち着いた雰囲気この男にはよ
く似合っている。よく見ればわかる程度に金の刺
繡^{しゅう}が施されているのも品よく纏^{まと}まつていて良い。

「私の顔でその柄^{がら}を着たら浮いてしまうからね。
羨ましいよ」

煌烈はあからさまに迷惑そうな顔をした。

兄は自分の身を飾ることに労力を費やすなど無駄
だと思っているのだ。この国の、しかも都の中枢に
いる人間としては至極珍しい。

郁耀の教育係の爺^{じい}やでさえ、毎朝口髭^{くちひげ}をぴんと整
えて、季節ごとに衣装の色や柄を変えのを楽しみ
にしているというのに。

「お前が私を褒^ほめる時はろくなことがない」

女が聞いたなら惚^ほれ惚^ほれするような低音で煌烈は
言い、渋い顔を更に険^{けわ}しくした。

「やはり……何か企^{たくら}んでいるな？」

「まさか。律花への使者として相応しい出で立ちだ
と思っただけだよ。きつと向こうの姫君もお気に召
すだろう」

「私が結婚するわけではないのだが」

「ともかく信用が大事だろう？ 大切な姫君にとん
だ試練を強いるわけだからね」

煌烈は艶^{つや}のある黒髪をかき上げて、律花のある北
西の方角へ目をやった。

「私^{わたし}がその姫の兄か父親だったら、この縁談、命に
替^かえても阻止^{そし}するがな。うまく行ったところで相手
がお前では……」

郁耀はぷつと吹きだした。

「本当だね」

「だけど……と彼方に広がる大草原を見つめる。

「吹かせてみたいと思わないかい？ 新しい風を」

第一章

りん……りん……と鈴の音が聞こえる。

聳え立つ白い城壁の向こう。白壁と青い屋根の連なる城下町のどこから。

りん……りん……りん……と耳を揺する音は、涼しげでどこかもの悲しい。

夏至が近いのだ。

五つの島国の最北に位置する律花之国では、夏至が近づくと町や村のあちこちに、掌に乘るくらい小さな狐の雪像が置かれる。

狐の雪像を作るのは、その年に死者が出た家だ。

鈴の音は、北の果てにある凍狐の災獸廟へと死者の魂を導く葬列が訪れたしらせである。

城の中庭の青い屋根を持つ四阿の前で、末姫は

脚立の上に腰掛け、熊の雪像の仕上げにかかっていた。

母熊から離れたばかりの仔熊が、この先自分だけで生きていけるのか不安に駆られて空を見上げている。そんな姿を表した雪像だ。

材料は、永雪と呼ばれる凍狐からの賜り物だ。

永雪は律花之国の北にある災獸廟の近くにのみ降り積もる雪だ。普通の雪と比べると灰青い色をしており、夜になれば月の光を受けて青く光る。

この国にある限り、真夏の太陽の下でもほとんど溶けることはない。ただし、器に入れて数日間煮立てれば溶けて薄青色の水になる。その水を飲めば傷や病が癒えるとも言われている。

その貴重な雪を固めて像にすること。それが、国主である姉から与えられた末姫の役目だ。

庭を飾ることが目的ではない。

城下で熱病が流行った時などのために薬として備蓄しているのだが、雪室に積み上げておいたのでは

不届き者が盗み出して行くことがある。だから、少しでも削られたならひと目でわかるように精巧な獣の像にしているのだ。

ほんやりとした頭に、りん……りん……という鈴の音が紛れ込む。

そう言えばここ数日、作業に夢中で眠っていない。ほんの少しだけ……と目を閉じると、あつという間に意識は体を離れ、城壁を飛び越え、鈴の音の方へと飛んでいった。

鈴を鳴らして町を練り歩くのは、青い衣装を纏った十歳前後の少女たちだ。

華奢な手首に巻いた鈴を揺らし、しずしずと進む彼女たちの顔は見えない。銀青色の狐の仮面を被っているせいだ。

狐面の少女たちは、町家の戸口に置かれた死者を弔う狐の像をそつと崩してその場を去る。そこから死者の魂を取り出して連れていくのだ。北の果てにある凍狐の災獣廟へと。

凍狐の元へと魂を運ぶ狐面の少女たちは、故人の家族や親戚の幼い娘と決まっている。

七年前の十一歳の夏。末姫もまた、狐の面を被つて列に加わった。父の魂を凍狐の元へ送るために。生まれて初めて城下を出て、針葉樹の森を幾つも抜けて、見知らぬ町で宿を借りて、切れこんだ谷を越え……古びた吊り橋を渡り……。

そして……そして……。
あれは？

白樺の林の奥。白く煙る雪原の向こう。

雲の向こうの月のような、仄明るいあの光……。
何か恐ろしいものかしら。

凍狐さまが怒っておられるのかしら。
わたくしが、悪いことをしてしまつたから……。
がくんと頭が前に落ちて、末姫ははつと目を覚ました。

眠気に負けて、あやうく脚立から落ちるところだった。

自分の頬をぎゅうとつねり、一度きつく目を閉じる。脚立を降りて後ずさり、熊の雪像のできを確かめた。

天を仰ぐ熊の顔はなかなか可愛らしい。背中から尻にかけての線は若熊らしくやや固い。地面に付いた前肢の形、爪の大きさ、投げ出した後ろ肢……。

「あら？」

末姫は唇に手を当てて首を傾げた。

後ろ肢のどこがおかしい。角度？ それとも長さかしら？ 納得がいかない。気持ちが悪い。

「直さなくてはいけないわ」

呟いて末姫は雪像に背を向けて歩き出した。

中庭を抜けて裏庭に回り、隅に建つ古い炭焼き小屋の戸を勢いよく開ける。

炭焼き用の窯は取り払われ、代わりに幾つもの棚や箱がところ狭しと並んでいる。

木箱から突き出しているのは真っ白でなめらかな何本もの骨だ。

鹿や狼など、獣の種類によって分けられている中から、熊の箱を見つけ出す。

中を探り、丸い腰骨と細い指の骨、それに後ろ肢の大腿骨などを取り出す。それを作業台の上に次々に並べていった時、「末姫さま」と自分を呼ぶ声が出た。

今にも泣き出しそうに震える幼い子供の声だ。

つい最近城に上がったばかりの、まだ十にもならない、おどおどとした小さな少女に違いない。

扉からおどおどと覗き込む侍女と見つめ合ったまま、末姫は熊の大腿骨を抱きしめた。

「怖がらないで」

できるだけ優しい声を出そうと努めながら、末姫は白い塊がよく見えるように腕を開いた。

「これらはね、動物や鳥の体がどうやってできているか知るためのものなの。足の骨と腰の骨がどうやって繋がっているか、首の骨がどうやって頭の骨を支えているのか……。獣の頭の骨はね、首の骨より

も丈夫で、それにとっても重い。それなのに……ねえ、聞いていて？」

少女は顎をかくかくと震わせながら、白い前掛けを握りしめる。大きく見開いた目から涙がこぼれ落ち、ひくつと嗚咽が漏れた。

「どうして泣くの？ わたくし、少しも恐ろしいお話などしていませんか？ だって、わたくしだってお前だって、皮膚や肉をそぎ取ればここにあるのと同じ骨でできているのですもの」

わかる？ と末姫が一步踏み出すと、少女はぶるぶると首を横に振って後ずさった。

その拍子に小さな体が棚にぶつかり、がしゅんと派手な音がした。硝子でできた瓶が砕け散り、つんと鼻をつくきつい酒の匂いが部屋に満ちる。

「おっ、おとお許しくださ……」

少女はしゃがんで瓶のかけらを拾おうとし、次の瞬間「ぎゃああああ」と凄まじい悲鳴を上げた。怪我をしたの？ と伸ばした末姫の手を振り払うよう

に、小屋から駆け出ていった。

「……また怖がらせてしまったわ」

末姫は骨をそつと作業台の上に置く。

城の者たちに、どうして獣の骨を集めているのかわかって貰おうとしても、熱心に語れば語るほど皆顔を引きつらせて後ずさる。子供なら少しは興味を持つてくれるかもしれないと期待したがやっぱり逃げられてしまった。

肩を落として、床で砕けた瓶に視線を落とした。

ひと口吞めば世の憂さを忘れられると言われる忘酒の水たまりの中に、体長七寸（約二十センチメートル）ほどの蛇の死骸が転がっていた。鮮やかな青と黄色の縞模様、工芸品のように美しい蛇だ。「こんなに綺麗なのに、どうしてみんな嫌がるのかしら？」

末姫は、蛇の死体を掌に乗せて溜息をつく。

七年前、十一歳の誕生日の時に父がくれた贈り物だ。律花之国とは反対に、とても暑い国だという

環天^{かんてん}之國^{のくに}。そこに棲む砂蛇^{さじや}という毒のある蛇なのだという。

——律花^{りっか}の獸は、熊も狐も兎^{うさぎ}も貂^{てん}も皆白い毛皮が多いけれど、他国には鮮やかな色の生き物がたくさんいるのだよ。特に、この蛇は美しいだろう。

祝いの席で、父はお抱えの商人に取り寄せさせたという瓶を誇らしげに取り出してみせた。

——この蛇はね、何千何万という群れを作って狩をするそうだよ。想像してごらん。大地がこの色でいっぱいになるんだ。

父は、吸い込まれそうな灰色の瞳を輝かせてそう語った。末姫は胸を高鳴らせてそれを聞いていた。

ところが、四人の姉たちはあからさまな嫌悪の表情を浮かべていた。特に長姉である大姫^{おおひめ}は父を横目に睨^{にら}み、他の姉たちを誘って部屋から出て行ってしまった。

——大姫たちにはわからないようだね。

父は首を竦^{すく}め、悪戯^{いたずら}な子供のような顔で末姫を見

つめた。

——まあいい。私にはお前がいるからね。愛しい私の分身さん。

四人の姉たちは、末姫が幼い頃に亡くなった母の面影が色濃く、細面の輪郭に通った鼻梁^{びりょう}、そして切れ長の青い瞳を持っている。だが、末姫だけは父に似て、丸顔にやや低い鼻、そして瞳は灰色だ。姉たちの髪は白金に近く細くてまっすぐだが、末姫は淡い茶色でやや癖^{くせ}がある。

体型も、背がすらりと高く手足も長い姉たちに比べて、どうもいろいろ寸法が足らない。

誰もが溜息をつく神秘的な美しさを持つ姉たちと並ぶと悪い意味で目立つのだ。

それでも、父が「私の分身さん」と言ってくれると嬉しくて誇らしかった。

政^{まつりごと}や公務よりも芸術と学問を愛し、大姫が十六歳で成人するや国主の座を押しつけてしまった父は、姉たちからは「無責任な道楽者」と嫌われていた。

けれど、末姫は父の話を聞くのが大好きで、いつもそばにくっついていた。

自分だけが父のお気に入りです。父の味方なのだと思えば、姉たちと違う平凡な容姿もさほど気にならなかった。

しかし、父はその誕生祝いのひと月後、病に倒れてあつげなく逝ってしまつた。

「ごめんなさいお父さま。瓶を割つてしまつたわ」

しゅんと鼻を鳴らして、硝子の破片を指でつまんだ。手を切らないように注意しながら、窓から漏れる光に翳す。

曇りも歪みもない透明な硝子を作り出す技術は律花にはない。律花の南東に位置する芳卷之国でしか作ることができない高価な品である。

この小屋の窓にはまった硝子は律花の職人が作つたものだが、芳卷の職人とは腕に格段の差があるらしく、そこから見える景色は薄氷を透かすように歪んでいる。

——いつかお前を連れて、芳卷に行きたいものだ。生前、父はよくそう話していた。

——芳卷でなら、お前に絵や彫刻を存分に学ばせてやれるだろう。私もこの目で見てみたいよ。匠の国の職人たちの仕事がどれだけ素晴らしいのか。

「わたくしも行つてみたかったわ」

目を閉じてそつと呟いた時、遠くから末姫を呼ぶ声が聞こえた。

はつと立ち上がり、窓の陰から外を窺うと、曇天色の衣をまとつた大柄な女がこちらに近づいてくるのが見えた。

国主である長姉がいつも側においでいる侍女頭だ。

末姫は、部屋壁に嵌め込まれた鏡に駆け寄つた。袖で曇りを拭い、ぐいと顔を近づける。

手入れを怠つた髪、目の下にできた隈、荒れた唇。とても十八の……それも一国の姫君とは思えないほどいありさまだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。